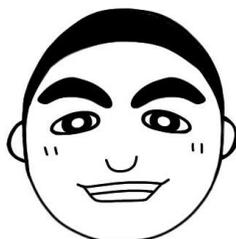
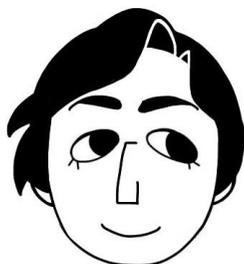
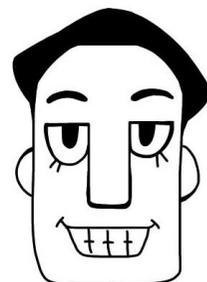
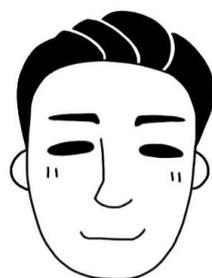


2021

道

No.46



西南学院大学 神学部学生会

1. 巻頭言

《祈り歩む道》

2021年度 学生会会長 原田 仰

主の御名を賛美いたします。日頃より私共神学生の学びと生活、また神学生の働きのためにお祈りのご支援をいただき、心より感謝いたします。諸教会・伝道所の皆様が祈りに覚えてくださっていることに強く励まされています。その励ましの中で行われる学びの一つ一つが神様によって遣わされる牧会の現場へのよき準備となっています。またその励ましがあるからこそ、学びに対してもますます真剣に取り組むことが出来ております。これからも神様が神学生一人一人をふさわしいものへと導いてくださるように引き続きお祈りいただければ幸いです。

本年度は本当に様々なことがある年度です。世界情勢、自然災害、五輪と昨年度から続く感染症のことなど、本当に多くの出来事が揺れ動いています。連盟でも機構改革などが本格的に話し合われています。学生会も昨年度から引き続けている組織改革のことや生活面でのことなどで多くの変化の波の中におかれた年度でした。しかし、そのような目の前が沢山の物事に溢れているからこそ、一度立ち止まって、「主に祈る」ことを大切にしなければならぬということを改めて思われています。その時々、事々に、神様が「私たち」と伴ってくださり、働きかけてくださっていることを思い起こすのです。

私たち神学生は一人一人が大学での講義による学び、研修教会による学び、神学寮での生活を通しての学びをしています。それらから何を学び取るのか、その視点はそれぞれ違い、考えも違います。その違いが故に、神学生同士で議論になること、悩みをおぼえることも少なくはありません。それは当然のことであるといえるでしょう。西南学院大学神学部に来るまでの経験、出会いがまるで違い、そしてそれぞれに個性もあるからです。だからこそ、私たちは共に祈ります。私たちは「キリストに聞き従う」という意志における祈りによって一致するのです。私たち神学生は神学生であると同時にキリスト者です。それぞれ違いを抱えている私たちは「キリストに従う」という共通した意志の中で学んでいます。各々が特別な視点をもって、同じ「キリスト」見て歩んでいるのです。

この冊子には、そのようにして歩んできた神学生、神学部教授の「道」が言葉としてつづられています。それぞれが歩んできた、その「道」を、それぞれに対する神様の働きかけを読み取っていただくと幸いです。またこれらの証を通して、神様との新たな出会いや、神様の励ましがあることを心より願っております。

目 次

1. 巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
 《祈り歩む道》 2021 年度学生会会長 原田 仰
2. 教員からのメッセージ・・・・・・・・・・・・・・3
 《ほとんどマネージャー、少し、けれどもリーダー》 濱野 道雄
 《名づけると、その名になった》 片山 寛
 《教派神学校で教派史を学ぶことについて》 金丸 英子
 《新型コロナ危機の中で～2年目を迎えて》 才藤 千津子
 《あなたの献身は
 キリストのからだなる教会の献身です》 日原 広志
 《ソーシャルディスタンスが求められる時代の
 自然に身を置いての祈り》 G.Rodriguez
 《三本の指を立てて》 須藤 伊知郎
3. 特集記事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
 《ミャンマーに思いを寄せて》 嶋田 健治
4. 献身の証・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
 日比 亜門
 長尾 基詩
5. 神学生紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
 【最終学年】
 大学院神学研究科博士課程前期 2 年 興津 吉英・安里 道直
 奥村 献・嶋田 健治
 神学部選科 3 年 林 守鎮
 特別研修生 日比 亜門
 【在校生】
 神学部神学科 4 年 原田 仰・吉田 睿濫
 神学部神学科 1 年 長尾 基詩
6. 編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

2. 教員からのメッセージ

《ほとんどマネージャー、少し、けれどもリーダー》



神学部教授（神学部長）：濱野 道雄

神戸女学院大学の教員であった内田樹さんが選択定年制で大学を5年早く辞めた理由は、会議や書類作成などの業務の量が増えて、教育と研究という本来の仕事に支障が出始めたためと述べています。少子化を背景に、文科省の管理によってすぐ役立つ「人材」を生み出すように助成金と引き換えに指導が行われている結果です。ただ、今のままでは日本の大学教育に明日は無いと言います。実際、大学教員による研究論文の発表数は減る一方です。論文を書く時間など無いのですから。

2021年4月から神学部長を仰せつかりましたが、内田さんの嘆きを実感します。西南神学部が「大学の一学部」であることと「教派神学校」であることを両立させるために、ますます知恵が必要な時代になりました。かと言って大学における神学教育を諦める訳にもいきません。「すぐ教会に役立つ『人材』」ばかり養成しているならば、教会に明日はありませんから。

神学部長というと大層な感じがしますが、実際は会議や書類作成に追われています。50代も後半に入った眼をこすりながら小さなエクセルの数字と格闘しています。事務職員に頼める仕事の量も限られていますから、会議資料を自分でコピーにかける教員がコピー機の前に並んでいます。「神学部長って…」と、まあ以前から先輩を見つつ思っておりましたが、分かりました。リーダーというより、マネージャー業務なわけです。高校の部活等で選手たちのサポートをしているあのマネージャーです。そのことに気が付き、かえって少しこの業務が楽しくもなりました。

様々な「～長」というポジションには3つの要素があると思います。リーダー（状況をとらえ、次の一步を明確に言葉にし、組織を新しくして前へ進める人）、マネー

ジャー（現状を理解し、組織を整えて維持する人）、そしてファシリテーター（関係する人と人の声を結び合わせ、人々をつなぎ合わせる人）です。まるで聖書の「預言者、王、祭司」というリーダーの3要素のように、です。実際、現在の神学部長の仕事はほとんどマネージャーです。それは文科省にせよ、大学自身にせよ（西南はどうでしょうか）、激変する世界において、ただ波をやり過ぎて現状存続することが最重要課題となっているからでしょう。本当の意味で変わる事などあまり求めていないのです。でもそれだけならば、内田さんが言うように、明日は無い訳です。マネージャー業務は楽しくもあるのですが、やはり現状存続だけではない、神の国を求めて変化し続ける神学をするには、少し、それでも明確にリーダーである必要もあるでしょう。そしてそれを独善的にやる時代は終わりましたので、ファシリテーターとして進めることこそまず求められます。

やはり曲がり角の所に私たちは立っています。

主はこう言われる。十字路に立って、眺めよ。古くからの通り道に尋ねてみよ。「幸いの道はどこにあるのか」と。その道を歩み、あなたがたの魂に安らぎを見いだせ。

（エレミヤ 6:16）

《名づけるとその名になった》



神学部教授：片山 寛

「人が生き物それぞれに名を付けると、それがすべて生き物の名となった」（創世記 2:19）

哲学の歴史の中で最大の革命は、14 世紀における「唯名論」nominalism の登場だと言われることがあります。これはオッカムのウィリアム 1285-1347 という人の名と結びつけて語られるのですが、これには留保をつける必要があるかもしれません¹。しかしとにかく一般的にはオッカム説と言われる、「普遍的な事物は実在せず、ただ名前（概念）だけである」とする主張のことです。「実在するのは個物だけだ」と言い換えることもできます。これはたとえば、「人間」という一般概念は、実在する個々の人間から抽象的に導き出された概念なのであって、その概念そのものが自然界に実在するわけではない、という主張でありまして、私たち現代人が日常的に当然だと思って疑わない考え方です。

ではそれ以前の人々はどう考えていたのかというと、普遍的概念の中でも普遍性の階梯が高い概念（真理）は確かに「実在」するのであり、その実在は、個々の事物の実在よりもずっと確かである、と考えていたのです。個物は今、ここで確かに実在しますが、それは生成消滅する時間的・空間的な存在者に過ぎず、明日は消えてしまうかもしれない不確かなものだ、と考えていたのです。古代ギリシアの哲学者プラトンのイデア説に淵源を持つこの思想は、14 世紀にいたるまで、ものを考える人々の間では当然だとされていた考え方であり、「実念論」あるいは「実在論」realism という名前で呼ばれます。

唯名論は神学にとって大きな危機をもたらすことになりました。なぜならすべての概念の中でも最も普遍性の度合いが高いのは、万物の創造者であり、万物に内在する「存在そのもの」である神であったからです。それまで神の実在は、確かに論理的に論証するのはむずかしいのですが、現実には証明する必要もないくらい当然のことだと考えられていました。しかし唯名論の登場以来、それは不確かなものとなりました。普遍的なものの実在が疑われるようになると、神は絶対的な個物と考えるしかなくなり

¹ 稲垣良典「オッカムの剃刀」 in: 『抽象と直観』創文社 1990 年、71 頁以下参照。

ます。全知・全能ですべてのものの上に絶対的な権力を有しているけれども、他方でご自身の被造物を愛しておられ、寛容であるがゆえに不正に対して沈黙しておられる神です。しかしそのようなこの世界の外側におられる神は、疑うことも可能になります。

「信じる・信じない」は個々人の主体的決断にかかってくるのです。唯名論の登場が宗教改革の原因だったと言われるのはそのためです。

現代ではさらに事態はすすんでいて、すべてのことは主観的であって、客観的真理などはないと考える人々も多く見受けるようになりました。日本でも世界でも、強弁しておればそれが事実になる、と考える権力者（政治家）が増えました。罰せられなければ、それは存在しない、というのです。インターネットという手段がますますその傾向を助長しています。ひとびとの間を情報がとびかいますが、真偽が判別できませんから、共同の広場（フォーラム）はなかなか生まれません。自己主張する個人たちが集まっているだけのようには思えます。対話がありませんから、対立は深刻です。

私たちが神を信じるとは、もう一度あの素朴なリアリズムに戻るということではないでしょうか。個人の主観性を越えた真理が確かに実在することへの信頼。そして相互への信頼関係にもとづいて、対話をするということ。同じ人生のテーマについて共に考えること。教会とはそのような対話の場所であると思います。

《教派神学校で教派史を学ぶことについて》



神学部教授：金丸 英子

「日本バプテスト連盟」規約（1997年5月16日施行）は、その第1章第3条で連盟の設立意義を次のように述べている。「連盟は『バプテストの主義と理想』に基づき、教会を包括して、その相互間の連絡及び協力を図り、教会の霊的生命を深め、伝道、教育、出版等を通して、基督の福音をひろめ、教会員及び求道者を教化育成し、その他この宗教団体の目的を達成するための財産管理その他の業務及び事業を行うことを目的とする」。旧規約には「**第三条 規準、本連盟ハ、バプテスト教会、本来ノ主張ト理想ニ於テ一致スル加盟団体ノ霊的結合ヲ存立ノ基盤トスル**」とある。

両規約の間に継承されている点、変更されている点があるのは言うまでもない。しかし、教派団体としての連盟が「バプテストの主義と理想」に則って結成され、そこに立って福音宣教の協力伝道を展開するという自覚と決意に変わりはない。そうであれば、我々の関心のひとつは「バプテストの主義と理想とは何か」を繰り返し学び、自らの基盤を確認することであろう。それによって自分をよりよく知り、そこから異なる他者と共に主のために働く可能性の地平も開ける。自分の足元が不確かなままで実のある「協働」もないであろう。神学部も連盟の「教派神学校」であれば、その「バプテストの主義と理想」に関係する研究と教育が求められる。バプテスト史はそれに近い科目である。

ところが、そのバプテスト史が必修でなかった時期があった。改めて(?)必修科目となったのはここ20年にも満たない比較的最近のことと記憶する。つまりある期間、自分の教派について専門的に学ばないまま、牧師として赴任した卒業生もいたかもしれないということである。教派神学校が自派の歴史や特徴を学ぶ科目を必修にしていなかったことについては、歴代の教授会がその必要を軽んじたとは考え難いので、願いながらもそうできなかった事情があったのであろう。私個人は、諸教会と連盟が「バプテストの主義と理想」に基づいて主の働きを担おうとしているという認識とそれに対する信頼を背に、拙いながらこれまでバプテスト史を担当してきたつもりだったが、今、それが空回りしている。

「バプテストの主義と理想」は日本バプテスト連盟のそれでも、日本にバプテストの信仰と実際を伝えたアメリカ南部バプテストの「主義と理想」でも、時のバプテスト・リーダーシップのそれでもない。その昔、17世紀のヨーロッパで、信仰の信念のゆえに誹謗中傷され、命の危機に晒されたバプテストの先達は、活ける復活の主とそ

の導きだけを頼みとし、私心を排して真摯に聖書に聞きながら、神と隣人に自らを低くし、開く信仰の告白を生きたのである。「バプテストの主義と理想」の根拠はそこにある。私たちは、これら歴史の良心的なバプテストたちの系譜に連なりたいものである。

旧規約に「**バプテスト教会、本来ノ主張ト理想ニ於テ一致スル**」とある。今でもよく耳にする「バプテストは何でもあり」で行けば、これは必要ない。信条を持たず、万人祭司「性」を尊重し（「制」ではない!）、よって牧師の教職制をとらず、各個教会の自主独立と民主的な教会運営を教会形成の柱とするバプテストがその「主張と理想」を曖昧にすれば、「バプテスト」とは似ても似つかないケースが出てくることは火を見るより明らかである。そうならないための神学部の学びである。そこには「バプテスト教会、本来ノ主張ト理想」の意味するところを批判的に学び、そこに「一致スル」基盤を見出そうとする探求のため環境が提供されている。これは「教派に凝り固まる偏狭」から程遠い。バプテストの先達に励まされながら、バプテストとしての歩みを識る学びである。

《新型コロナ危機の中で～2年目を迎えて》



神学部教授:才藤 千津子

新型コロナ感染拡大のため、昨年以來、大学でも断続的に遠隔授業が行われてきました。また、福岡地方のほとんどの教会が、対面での礼拝から YouTube などを利用した遠隔礼拝を行いました。昨年来のこのような状況を、感染予防に携わる人たちは「災害」だと表現します。確かにある意味で、現在は、日本中、いや世界中が「危機」の中にあると言えるでしょう。大学生を対象にした調査では、遠隔授業が続いた昨年度、心理面で深刻な影響を受けたと訴える学生がかなりいたと報告されています。また、多くの人々が、コロナ感染によって亡くなったり、感染予防のために「人と会えない」「触れ合えない」ことで辛く寂しい思いをしています。

しかし、「危機」の時は、新たな地平が開かれる可能性がある時でもあります。コロナ危機の前、私は、毎日、コンピューターに向かって慌ただしく大量の情報を送受するような日々を過ごしていました。主の前に一人座してゆっくりと静かな時を過ごすという心の余裕は、なかなか持てませんでした。

しかし、昨年来、コロナ危機の中、それまでのようにやってゆけなくなった時、私は否応なしにそれまでの生活スタイルから解放されました。そして、自分の生活、信仰や価値観を見直すようになりました。今年の5月には病気で10日間ほど入院しましたが、その出来事も私の変化をさらに促してくれました。そんななかで、改めて詩編の数々の祈りに出会いました。

詩編の中には、神に向かって怒りをぶつけるように叫ぶ絶望の嘆きの詩が数多くあります。

詩篇 69 篇2節から3節(新共同訳)

神よ、わたしを救ってください。大水が喉元に達しました。

わたしは深い沼にはまり込み 足がかりもありません。

大水の深い底にまで沈み 奔流がわたしを押し流します。

そして、いくつかの詩編では、このような激しい嘆きの訴えが長く続いた後、突如として神への賛美の祈りに変わります。突然、神との新しい関係が開かれるのです。

詩篇 69 篇 31 節

神の御名(みな)を賛美してわたしは歌い 御名を告白して、神をあがめます。

ここに何が起こったのか、どうして急に嘆きが賛美に変わったのかはわかりません。明らかなのは、ここに至る前まで、詩人が、苦しみ・嘆きの大きな波に翻弄されながら、追い込まれ、方向を喪失していたことだけです。しかし、詩人の絶望と苦悩がまさにその頂点に達したとき、突然、神の目に見えない力が介入し、それまでの苦しみが別の姿に変容します。そして、詩人は、喜びとともに神を賛美します。

この詩編を味わうとき、今私たちは、光がみえない状況の中に座しながら、それでも希望を持って「待ち続ける」という祈りを学んでいるのかもしれないと考えるのです。

《あなたの献身はキリストのからだなる教会の献身です》

神学部准教授：日原 広志



献身を考えておられる皆様へ

献身は個人の事柄ではなく、キリストのからだ（教会）の肢体としての献身です。たとえ召命体験において神-我の1:1の関係が強烈に刻印されたとしても、基層には教会の長い祈りの歴史が存在します。ひとりぼっちの献身はあり得ません。「個人の勝手にしょ」型献身もあり得ません。「ひとりぼっちの真打登場」型献身には一秒も早く死に、「教会の献身が偶々我が身に生じた」者として復活しましょう。御自身の教会総会で教会員から「キリストのからだを引きちぎられる傷みに耐えて送り出す、私たちの教会の献身だ！だから私たちは直言し、あなたの献身を吟味する！」と批判と吟味にさらされる献身者は幸いです。それを喜べる者へと主によって変えられて神学部へ旅立ちましょう。

西南学院大学神学部の三本の柱

西南では、「クラスにおける神学の学び」と「研修教会」と「寮生活」を神学教育の三本の柱として位置づけています。

神学の学びにあたっては、「入学前の自分のまま、知識のみ増やす」「神と聖書についての答えを握り自己絶対化するために学ぶ」のはやめましょう。自己実現、自己中心の献身はあり得ません。献身とは自己中心から神中心への転換です。神学とは神から学ぶことです。主語は神です。要／不要を決めるのも神です。未知のものに開かれ、砕かれと再構築を恐れず、相対的限界性の中に留まる忍耐を身に付け、「聖書も神の力も知らないから」「思い違いをしている」（マコ 12:24）者として、活ける神から学んで下さい。

研修教会においては、キリストのからだなる研修教会の肢体になりきり、一に傾聴 二に傾聴、研修教会の課題を自分の課題とし、完全に理解するまでは最終的判断は下さず、福音について最も分かっていないのは自分という謙虚さを持って、活ける神か

ら学んで下さい。

寮生活においては、生の全領域に亘る全人的交わりを通じて人間関係の紡ぎ方、破れ方、壊れ方、繕い方、和解と共生を体験して下さい。そこにおいても相手は個性豊かな他者であるだけでなく、その一人の背後にキリストのからだをひきちぎられる痛みを以て送り出した各個教会がある（いる）ことを忘れず、「協力伝道の課題と喜びの縮図」としての寮生活を通じて、牧師となる上で不可欠なものを、活ける神から学んで下さい。

主は生きておられます。安心して下さい。

《ソーシャルディスタンスが求められる時代の自然に身をおいての祈り¹》

神学部准教授：Girardo Rodriguez

ヒラルド・ロドリゲス



コロナと過ごす二度目の夏です。

前期の学びや仕事が終わった時、私たちの誰もが夏期休暇を楽しみにしていました。しかし、パンデミックの危機にさらされ、再び緊急事態宣言が発令されました。結果的に、多くのレジャー施設や商業施設が一時的に閉鎖され、夏季休暇を満喫する機会が制限されることとなりました。福岡の子ども向けの施設や大型遊具の利用は禁止され、地元の公園でさえ夏休み中は閉鎖されたままでした。しかし、どうしたわけか様々なショッピングモールや大人向けの娯楽施設は、世界中どこも営業を続けています。

都会に住む方々は、一体どのように子ども達に満足のいく夏の経験をさせてあげるのでしょうか。

私たち家族の場合、早良区内の近くの山や川といった人混みの少ない自然の中に子ども達を連れていきます。

ご承知の通り、自然を楽しむ事によって私たちは神の被造物を直に見るという機会を得ます。この自然は、まさに創世記で語られる創造の業であることを必然的に私たちに思い起こさせてくれます。

自然を眺めることによって、気づかぬうちに『アウトドア体験』が『祈り』へと変えられるかもしれません。新鮮な空気は、神の聖なる息吹を思い起こさせてくれます。優しくありながらも力強い風、まさに神の聖霊を表します。“*Veni Sancte Spiritus!*” (ヴェニ・サンクテ・スピリトゥス＝「霊来たりたまえ」)は、古いラテン語の賛美歌でその事を歌っています。

聖霊よ来たりたまえ。

御身の光の輝きを、

天より送りとたまえ。

¹ 本稿の翻訳にご尽力頂いた藤原宣子さん（早良キリスト教会）に感謝申し上げます。

貧しき者どもの御父よ、来たりたまえ。
賜物を与えたまう御方よ、来たりたまえ。
心の光よ、来たりたまえ。

誰よりも良く慰めたまう御方よ。
魂に宿りたまう優しき御方よ。
優しき慰めよ。

パンデミックや道徳的混乱といった時代において、どうか聖霊なる主が優しく、しかし力強く来て下さり、私達一人一人、教会、日本そして全世界を新たにしてくださいように！

雨の多い夏でした。豊かな水は植物や木々に命をもたらしました。森や山の緑は青々とし、曇り空は太陽の熱から守ってくれているようでした。初めに神の霊が水の面を動いていたように（創世記 1 章 1-2 節）、どうかキリストが命の水で私たちに満たし、私たちの魂の渇きをいやしてくださいますように。

しかし、一方では洪水は日本や世界のいたるところで災害を引き起こしました。その事の上に、主の癒しが豊かにありますように。また、社会的不正に対しては、主の命と喜びを注ぎ出して下さいますように。かつてイスラエルの人々が砂漠において雲によって守られたように（出エジプト記 40 章 38 節）、主よ、私たちにとっても雲となりどのような危害からも守ってくださいますように。

曇りの日が続いた後の太陽は、まぶしく暖かいと感じます。また、夜には月や星を楽しむ事ができます。ほとんどの人は町に住んでいますので、残念ながら満天の夜空を満喫するというのは難しいですが...。創世記に『神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、』とあります（1 章 3-4 節）。この後、神は被造物を照らし、時を示すために天に輝く太陽と月と星、天体のすべてを創造されました（創世記 1 章 14-18 節）。どうか永遠の光であるイエス・キリストが私たちの命を照らし、すべての闇を取り去って下さいますように。どうか世の光、光の子らとして歩み、悪を善に変えようと努める私たちを御霊の火によって強めて下さいますように。

そうです！キリストの御霊よ、来たりませ！

《三本の指を立てて》



神学部教授：須藤 伊知郎

西南学院大学神学部からこれまで2名のミャンマー出身の学生が卒業している。現在国分キリスト教会のマウマウタン牧師と、ヤンゴンにあるウ・ノー記念バプテスト教会のマ・ルサン教育主事である。この卒業生のつながりからOGの黒瀬聖子さんの協力も得て、神学部は2015年からミャンマー・キリスト教神学校(MICT)と交流を始め、英語の神学書を贈ったり、学生を研修旅行に派遣したりしてきた。ところが、今年の2月にクーデターが起こって学生を派遣できる状況ではなくなり、大変心配している。

ミャンマー・バプテスト連盟はいち早く国軍に対する抗議声明を発表し、その英語版を濱野神学部長が入手されたので、私が翻訳したところそれがSNSで広まった。5項目の声明の第3は「ミャンマー・バプテスト連盟は、聖書の教えに反するいかなる抑圧的支配システムも拒否します」と宣言している。これに呼応して日本バプテスト連盟もミャンマー連盟へ祈りと連帯の書簡を送った。

MICTはfacebook公式ページに「私たちは民意である選挙結果の無視と不法な権力奪取を強く非難する」という横断幕を教職員が掲げ、独裁者への抗議を示す三本の指を立てた写真を掲載している。「外国の反政府勢力と結託している」という非難を招かないように、私たちから直接連絡を取ることは控え、MICTの投稿を見守っている状況である。このところ教職員のコロナによる葬儀の書き込みが続いており、スタッフの心痛はいかばかりかと胸が痛む。

ネットではクーデターの直後から毎週金曜日に「ミャンマーを覚えるの祈り会」が開かれ、私もほぼ欠かさず参加している。そこで7月半ば、日本バプテスト同盟杉並中通教会のマ・キン・サンサン・アウン牧師と私が対話した回があったのだが、彼女は「これがあるって耐えられてる…みんなが痛みながら共に祈ってくださることが励みになり、仲間がいると感じることができる。…10年後、20年後に必ずこのことが世界に良い証となることを期待して、信じていきたい」と涙ながらに語ってくれた。私たちも三本の指を立てて、ミャンマーに一日も早く平和が確立されることを祈りたい。



3. 特集記事

《ミャンマーに思いを寄せて》

大学院神学研究科 博士課程前期 2年：嶋田 健治

2月1日の朝方、ミャンマーの友人たちが三本の指を立て、道でデモ行進をしている画像をアップロードしていた。何事かと思い、ニュースをみるとクーデターが起こったことがわかった。

私は2019,20年にミャンマー研修旅行へ行った。人文学コース生や浦和キリスト教会の方々も一緒であった。現地では、西南神学部と交流のあるMICT(Myanmar Institute of Christian Theology)へ訪問し、学生同士の交流や説教をさせて頂いた。他にもユアマバプテスト教会やウ・ノー記念バプテスト教会に訪問した。ウ・ノー記念バプテスト教会では、女性会や青年会、子どもの教会学校に参加させて頂いた。他にも様々ある。

また、ミャンマーは、アジア最後のフロンティアとして他国の企業が進出していた。日本も例外ではない。技能実習生として、日本に来日するために日本語を学ぶ学生とも交流する時間があった。彼ら彼女らの目は希望で満ち溢れていた。大阪に行くからたこ焼きが食べたいと言っていたのを思い出す。日本から来た人たちは、一部の日本企業によって技能実習生が不当な扱いを受けている事情を知っていたので、なんとなく申し訳ない顔をしていた。命より利益を求めている一部の日本の現状が既に伺える。

ミャンマーのバプテストは、アジアの中でもかなり長い歴史を持つ。MICTは、バプテスト派の神学校であり、尊敬する学生や教授ばかりだ。西南神学部とは、洋書の神学書を送り交流をもつ関係である。ミャンマーという国は民族をアイデンティティとして持つ方々が多くいる。よってミャンマー人は存在しないと言われた。その部族の文化で宣教(神の働き)ができるよう、寮も実践を考え、民族で分かれていていた。面白かったのは、神学校を卒業したら、自分の推薦教会で教会学校の先生をする、音楽の先生をするとのことだった。牧師になる方は大学院まで進学するとのこと。

神学部で学ぶということは、決してハードルの高いものではなく一つの学問として多くの青年に親しまれていた。

現地の方々との交流や異文化体験をするのは、私が生きていると感じる瞬間である。そのような思い出が詰まったミャンマーで通った道や、食事をとったデパートの前で、大勢の方々が三本の指を立てて自由と平和を求めて抗議運動しているのである。あの時に見た楽しかった景色が緊張感溢れる現場へと変わっていく。しばらくすると、軍による殺人が起り始めた。実家で火事が起こっているような気分である。日本にいる私には気分ではないが、現地の方々にとっては、それが現実である。私の Facebook でシェアされる友人たちの投稿は、生々しい血と臓器やご遺体で溢れている。町々が火で燃え、銃弾が飛び交っている。森の中へ避難する方々。イースターエッグには平和を求めたイラストが描かれていた。他にも沢山。心に潤っていたミャンマーの思い出が熱風に吹かれ、恐怖へと変わっていくのをジリジリと感じている。この恐怖を誰にどう伝えていいのか未だにわからない。ただ、何かミャンマーに住む方々、ルーツを持つ方と何かしらの形で連帯したいという思いで一杯である。

6月24日に「ミャンマーに平和を・祈りと連帯の集い」がインターネットを通して行われた。アルバイトなどで全員参加は叶わなかったが、西南神学生もこれに参加することとなり、祈りを参加者で考えた。作成したのは有志の神学生であったが、もちろん祈りは共有している。その時に作成したものを紹介したい。

西南学院大学 神学部・神学研究科 有志

ー私たちは誰か

私たち西南学院大学神学部及び大学院神学研究科は「Be True To Christ」(キリストに忠実なれ)という建学の理念のもと、キリスト教について学び、牧師や社会人として平和、福祉など様々な社会奉仕の精神を育むために学んでいます。

ーバプテストと争い

西南学院大学は、プロテスタント系、バプテストの大学であり、バプテストの先達は、社会や政治に対して、政教分離や信教の自由を訴えてきました。しかし、一方で戦争や奴隷制に加担し、人を傷つけ、命を奪ってしまっている歴史も持ち合わせています。その歴史の反省へと立ち返り、平和を訴えていきます。

ーミャンマーと西南

また西南学院大学神学部は、ミャンマーへの研修プログラムもあり、バプテスト教会や、Myanmar Institute of Christian Theology というバプテスト神学校と交流を持っています。この時代に共に、バプテスト教会へと遣わされるため神学を学ぶ私たちの仲間が現地で抗議運動に参加しています。

ーミャンマーに思いを寄せて

2月1日から続いているミャンマー国軍によるクーデターは、私たちの心を騒がし、痛み、悲しみの淵へと追いやる出来事です。思いを寄せて日々祈りを紡いでいます。軍事や武力による政治が淘汰されることを願います。そして、いつの日にか平和が訪れ、ミャンマーで再び民主主義による政治が行われることを信じます。

ー何を祈るのか

私たちは一刻も早く、軍事による暴力と支配が終わること、民主主義に基づいた政治が取り戻されること、命が守られることを強く祈り求めます。

祈り

私たちと共に傷つき、悲しむ神さま

私たちは、ミャンマーでのいろいろな出来事を知っています。

そして、多くの方の命が奪われていることも知っています。命こそ宝です。

どうか私たちの気持ちを知っててください。

ミャンマーに住む方々、ミャンマーにゆかりのある方々に一日でも早く、
平和と平安が与えられますよう切に祈ります。

「不安の中で痛みを抱えながら」部屋の隅で1人で祈っておられる方々と
祈りを合わせて祈ります。

考えなければならないのは「被害者の消費」である。同情を誘うようなことや、「やっている感」だけは避けなければならない。このように文章を書くのも緊張する。ファッションでやっているのではない。その場に生があり繋がりがあある。その一つ一つの出来事を心に刻んでいかなければならない。

神学をするということは決して聖書の勉強や教会の歴史をすることだけに留まらず、聖書や歴史を読み取り、現代に神さまがどのような形で働きかけているのかを思考し、その座標を見定めることも含まれていると考えられている。私たち神学生はミャンマーに思いを寄せ、このような祈りを作成した。

他にも今年度の西南学院大学神学部紹介動画では、ミャンマー国軍への抗議運動に連帯するメッセージを加えた。西南神学部の教授が MICT の教授に動画を送ってくれたと聞いている。様々な意見が飛び交う中、結果としてこのような形となった。国外勢力との連帯がミャンマー国軍に知られてしまうと先方にも被害が及ぶ可能性がある。教授も交えて慎重になって作成した。私たちにはミャンマーにいる隣人を無視することはできない。ここにも神学の座標がある。

日に日にミャンマーの現状は変わっている。抗議運動の形や、軍による被害、武器のやり取り、国際連合の動き。それと同時に祈りは変化し、私たちの行動が変わっていく。私たちが今何を祈り求めて行動するのか。それを神さまと対話しつつ求めていく作業をしている。神学部での礼拝ではミャンマーのことを祈り、情報を共有し、紹介動画やこのような記事として形にした。

十字架の上のイエスが、「我が神、我が神、何故私をお見捨てたのですか」という祈りの、「何故」をギリシア語「εἰς τί」(マコ 15:34)を直訳すると εἰς (for) τί (what) 「何に向けて私をお見捨てたのですか」と、未来を見据えた祈りとなっている。私たちも、現在の状況を嘆きながらも未来を見据えて祈る。

夜に朝日が差し込んで、光のカーテンが三本の指を差し伸べるかの如く、ミャンマーに平和が訪れる。



2021 年度 西南学院大学神学部 紹介動画より

4. 献身の証

日比 亜門

私は1993年5月に生まれました。教会に通うようになったのは中学生になった頃からです。母に連れられて筑紫野二日市キリスト教会に通いました。高校は西南学院高校に進学し、そこで聖書の授業に出会いました。週に1コマある聖書の授業は、私にとってとても興味深く、楽しい時間でした。「もっと学んでみたい」「自分も聖書の話の語れるようになりたい」と思いました。このことがきっかけで神学校へ進むことを考え、また高校2年生の秋にバプテスマを受けるに至りました。

バプテスマを受けるにあたって、自分がどうして聖書に証される神様を信じているのかを改めて思い返しました。その根拠は創世記の1章にありました。「被造物は全て、極めて良く造られている」この事実が私の希望です。中高生の多感な時期にあって、自己の存在や、また世界との関わりについて思い悩んでいた時、聖書のこの言葉は私の見るべき方向を指し示してくれました。そしてその創造主である神が、私たちのために愛する独り子を遣わしてくださいました。どうして、このお方に付き従わないことがあるのでしょうか。いえ、ありません。これが、私の信仰の告白です。

その後、高校を卒業して、日本基督教団の東京神学大学へと進学しました。大学院の卒業まで、実に9年の歩みでした。だいぶ時間がかかってしまいましたが、しかし今となっては神様が私のために備えてくださった相応しい時間であったと感じています。

卒業が遅れた理由は「体調を崩しての休学」「必修科目を落としての留年」「修士論文に時間をかけたい旨での在学期間延長」です。特に大きかったのは休学に関してで、これは学部3年次のことでした。学部3年では環境の変化があり、また何かと役割や責任を与えられる中で、自分のキャパシティを超えてしまって、精神と体調を崩してしまいました。実家に逃げ帰り、半年ほど寝込んでいました。病んでいてはほとんど無気力で、無性に悲しくなったり、怒りを覚えたりもしました。腸炎で病院に担ぎ込まれることもありました。しかし休養の時間が与えられ、癒されたことは、ただただ感謝です。辛い経験ではありましたが、こうして立ち直れたことを思うと、「弱い時にこそ強い」という御言葉や、神の召

しの力強さを感じます。私自身この休学を通して、あまり無理をし過ぎないということや、自分のペースを大事にすることを学びました。

また9年の歩みにあって、教会生活もよく守られました。最初の3年間は調布バプテスト教会に、その後の6年は三鷹バプテスト教会に通わせていただきました。「よく養われなさい。そうしたら、よく養うことができる。」との教えのもと、本当にたくさん養われてきました。ただただ感謝です。

そして、この春より西南学院大学神学部で学ばせていただいております。それは自分がバプテストの出身であるというアイデンティティを磨き、そのバプテスト連盟で務めを担うに相応しい備えをするためです。あまり体が丈夫ではありませんので、いくらか休んでしまうこともありますが、それでも頑張れたらと願っています。

2003年3月19日千葉県習志野市津田沼に生まれた私は、幼いころから引っ越しを経験し、残っている記憶は小学2年生まで通っていた恵泉バプテスト教会からでした。比較的大きな教会にはたくさんの同年代の友達がいいて、教会というのはすごく楽しいところなんだ思っていました。父の牧師としての赴任先が決まり、私もそちらに行くことになりました。小学3年生から中学校卒業まで、長崎県壱岐の島にある壱岐キリスト教会に通い、また暮らしていました。バプテスマを受けたのはこの時です。小学6年生の夏でした。その年の春に全国子羊大会が開催されました。プログラムにあったバプテスマへの促しの時と、共に集まった仲間たちに何より背中を押され、バプテスマを受ける決心をしました。まだ何もわかってはいませんが、子供なりに神様を信じることを決心し、告白しました。バプテスマリーがなかったため、子供用の空気で膨らませるプールでバプテスマを行ったのを今でも鮮明に覚えています。今思えば、壱岐の島での生活は大変貴重かつ不思議なものでした。本土とあまり交流のない世界で、キリストを信じる小さな群れが立ち続けるという事自体が神様からの賜物ですが、そこに集まった信仰者からも鬼気迫った覚悟が感じ取れました。自分たちが圧倒的マイノリティであるという状況でなお、イエス様を信じ続けるということがどれほど重いことなのかを実感させられました。

高校からは東京の学校に通うことを決意し、府中キリスト教会に転会しました。そこでは、様々な価値観や、信仰的背景を持ったクリスチャンが集っていました。環境が激変したのでより強くそう感じたのかもしれませんが。しかし、「信じる」ということがそう単純に解決する事柄ではないということも同時に思い知りました。生活に悩みを抱え、苦しみの中に生きている方、信じたくても何かが邪魔をして救いがないと感じてしまう方、この場には到底書ききれません。しかし、救い主がおられ、救いが存在する以上、世のすべての人は救われるべきです。神様が働き人として私に呼びかけてくださっていることにその時、気づくことができました。これまで

の人生で、教会の方から常に祈られ、見守られながら育まれてきたことにも気が付きました。正直、一度大学に行って編入学等の手段で神学校に行こうかとも考えましたが、祈って考えた時に私に待つことなど到底できませんでした。キリストの救いを宣べ伝えるものとして今、内的に集中し、勉学に励んでいる途上です。祈りと支援に支えられながら、小さくはありますが、それでも一步一步進んでいます。この献身が神様の御心になうものとなりますように祈ります。

5. 神学生紹介

《祈りの場でのある出逢いから》

研修教会：かたえキリスト教会

推薦教会：かたえキリスト教会

神学研究科博士課程前期2年 興津 吉英



三年目の覚束ないシニアの学びですが、その機会を備えて下さった、全国の教会の皆様はじめ先生方そして若い同学の皆さんへの感謝のもとに、教会に還元することをイエスさまが求めておられます。教役者が足りなくなる状況のなかで、そのような諸教会での、どのようなかたちでかの、み言葉の奉仕ができるならと考えています。

が、このごろなぜかとても単純に、次のようなことが心に浮かんできます。それは

” いい、「教会のおじいちゃん」になれたらなあ”

私が思い出すのはSさんという方のことです。Sさんとは20年ほど前に数回お会いしただけです。年に一度9月に宗像の「黙想の家」であったアシュラムでのことです。5人ほどの小グループに別れ静かに聖書を読み、示されたと思うことを語り合い、祈りを共にする超教派の集いです。7~8年間ほど参加したのですが、しばしばSさんが私のグループのお世話係でした。なぜかよく作業服を着て参加され、会の合間には敷地内の掃除や片付けをしておられました。自分のことを「無学な者で」と言っておられました。いつも元気っぱいの自信(というより確信!)に満ちた語り口でグループでの対話をリードされました。その年の聖句を太いサインペンで書いてこられ、大きな声で福音の素晴らしさを力説されます。

「いいですか皆さん。聖書から離れてるときはどんなですか。それは、グズグズ、めそめそ、イライラでしょう。でも聖書に来るならイエスさまがそれらをゼーンぶ吹っ飛ばして下さり、イキイキ、わくわく、ハキハキの人生です。」

本当に「元気をもらう」という感じでした。Sさんはまだ60代ぐらいだったと思います。グループではそれぞれの悩みとかも話すのですが、お互いのプライバシー的なことにふれることはありませんでした。

ある年のアシュラムの開会礼拝、Sさんの姿が見当たりません。私は直感しました。あのSさんが欠席するはずはない。礼拝の中でSさんの昇天のことが語られました。もう半年以上前だったということです。驚くとともに納得しました。悲しかったですが感謝と、讃える気持ちで、心の中で「Sさんありがとう、ご苦労様!」と言いました。

Sさんの思い出は、心の中に生き続け、むしろ成長しているようです。教会の中で外で、Sさんのようにはできなくとも、隣の人に福音で元気を与えるクリスチャンをめざしたいです。

《虫たちはどこに行った？》



研修教会：鳥栖キリスト教会

推薦教会：東風平バプテスト教会

大学院神学研究科 博士課程前期2年 安里 道直

2020年、新型コロナウイルスが蔓延して世界中の人が家にこもった時、サルやシカなどが町に繰り出し、イルカたちが海辺に戻ってきたというニュースを見た。その時あらためて、我々人間がいかに自然界を圧迫してきたのかを思った。

私は大自然が好きで、生き物についても少しは関心がある。ただそれだけの人間だが、そんな私が自然界の変化を感じている。そしてこれは、たかだか30数年しか生きていない者が実感していることなので、異常なスピードで起きていることだと思う。

まず、ハエがいなくなった。私が小学生の頃は、食事の席ではいつもハエを払っていた記憶がある。今はそんなことは滅多に無い。カタツムリもいなくなった。梅雨の時期にはいつもガラス戸を這っていたカタツムリは、どこにも見当たらない。またクモもいなくなった。沖縄にはオオジョロウグモという大きなクモがいて、鳥を捕らえることができるほどの巨大で強力な巣は、森の最大のトラップだった。しかし今は、森に入っても巣に引っかかるスリルは無い。他にもアリやチョウ、ミミズなど、言い出したらきりが無い。

それぞれの原因が何なのかは私には分からない。しかし今、人間による自然界の汚染が次々に明らかになっている。私には、これらが無関係だとは思えない。

虫が住めないような世界では、人間も生きていけないはずである。虫がいなければ食料はおろか、飲み水すらも得られないだろう。そもそも虫が生きられないような環境が、人間に無害なはずは無い。イルカやクジラが狂ったかのように岸に打ち上げられることが度々あるが、私はそれも環境汚染の影響ではないかとにらんでいる。そして、同じようなことがいつ人間に起きてもおかしくないと感じている。あるいはもうすでに・・・？

聖書において虫は、人間に危害を及ぼす存在として描かれる。しかしそのほとんどで、人間の落ち度が前提となっている。虫そのものが悪いのではない。虫たちはむしろ（ダジャレじゃないが）、人間の過ちをいち早く警告してくれる貴重な存在だと言える。現在の虫たちの失踪もまた、無視してはいけない重大なメッセージなのだろう。

「虫の知らせ」という言葉もあるが、それは単なる思い込みではなく、小さな変化を感じている証拠だろう。私たちは、そのような感覚と世界の変化にもっと真剣に向き合うべきではないだろうか。

《たとえ気づかれなくとも》

研修教会：姪浜バプテスト教会

推薦教会：恵泉バプテスト教会

大学院神学研究科 博士課程前期2年 奥村 献



医師でありペシャワール会の代表であった中村哲さんの冊子が、大学図書館の特設コーナーで配布されていました。そこに中村哲さんの西南学院中学校でのチャペル講話が記されており、その講話の最後に次のような言葉がありました。『恵みは気づかれなくとも備えられてある』という実証が、私たちのミッション（使命）ではないかと思っています。おそらく、これを日本社会で言うことは勇気がいるでしょう。変人だと思われるかもしれませんが、これに耳を傾ける時が来ていると思うのです。欲望を膨らませ、争いをあおる時代は自滅への入り口です。平和とは対極にあるものです。この最後の言葉は今多くの人と共に考えていたい大切なテーマであると思われました。

私がアメリカに留学していた2001年の9月11日、アメリカで同時多発テロが起きました。その後、多くの人々が“God bless America”と口を揃え、アメリカは2003年3月にイラク戦争へと突入していきました。開戦にあたり、当時大統領であったブッシュは聖書の言葉を引用しながら国民に賛同を呼びかける演説を行いました。教会の入り口にも大きな星条旗が掲げられていました。多くのキリスト者がこの戦争を積極的に支持しました。また、同時多発テロ直後からアフガニスタンに侵攻していた米軍は、20年近くの時を経てその国の安定的平和を構築する事もなく撤退しました。その後の混乱と国民の苦悩は連日ニュースで報じられています。

多くのキリスト者が賛同したこれらの無意味な戦争から、私たちは何を学ぶ事ができるでしょうか。たとえ「正義」や「大義」を掲げて始まった行動であっても、人間の暴力による支配や抑圧は何も生まないという事は言い切れるのではないのでしょうか。

日本も多くの国民が天皇陛下のために命を捧げた時代がありました。人間的な欲望に基づいた暴力が支配する世界に希望はありません。キリスト者はたとえ一時的にであっても、たとえ「大義」のためであっても、そのように命や尊厳を搾取する力に加担する事を神様が喜ばれるのでしょうか。一人の人間は完璧ではありません。限界もあることでしょう。しかし、その弱さに開き直って歩む事は次の搾取につながります。

「恵みは気づかれなくとも備えられてある」。平和の基をアフガニスタンの方々と共に作り上げた中村哲さんのこの言葉を、今あらためて私たちは信仰で受け止めていたいと思います。「むしろまず、[神の]王国とその義を求めよ。」(マタイ 6:33 岩波訳)

《ラップがある》

研修教会：福岡西部バプテスト教会

推薦教会：直方バプテストキリスト教会

大学院神学部研究科 博士前期課程 2年 嶋田 健治



私は吃音である。うまく話すことができない時がある。注文したものと出てきたものが違う時があるし、笑われることもある。悲しいし、苛立ちも覚える。上手く話せなかったと落ち込む。幼い頃からのことだから、いつの間にか人と話すことに疲れを感じ、口を噤むことがある。しかし牧師を目指す以上、何かしらの形で、工夫をするなり、克服するなりしなければならない。

学部3年が終わる頃、友人とカラオケに行った。ラップは元々好きで、カラオケでも歌うのだが、友人が完璧だったと褒めてくれた。後日、その友人からラップが歌えるようになると、吃音が治るらしいと教えてくれた。youtubeで検索してみると吃音の人がラップを歌う動画を見つけた。希望だった。私もラップがもっとできるようになると、今よりマンになるかもしれないと考えた。聞くだけだったラップも何度も練習し、何とかできるようになったり、できなかつたりした。またラップはHip-hopという文化の一つで、歴史的には無血で争うというギャングの非暴力による抵抗でもある。キリスト教とは相いれないものではない。BLMやミャンマーの抗議運動にも通じるところがある。私も権威に媚びへつらうぐらいならラップをする。

最近、人と話す時に、頭の中でリズムが聞こえていることに気づいた。相手の話す速度に合わせて、自分の心の波長が合わさっていく感覚である。それが音楽になって聞こえてくる。そうすると徐々に自然と話すことができるようになっていく。言葉を音楽に乗せて、流れるように言葉を吐く。

ヨハネ 1:1 「言」は λόγος (ロゴス) というギリシア語である。この λόγος (ロゴス) を事典で調べると「言葉」「話」「説明」「提案」など沢山の意味がでてくる。自分の頭にある「提案」や「理論」(logic)が「言葉」として口からでていくイメージができる。私のラップも λόγος となって、頭で考え、口からでていくのである。あまり気付かれはしないが、韻を踏んでみたりもする。

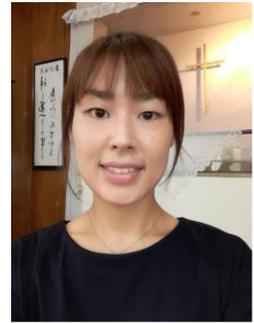
決して吃音が治ったということではない。まだまだ上手く話せない時もあり、注文をするのも一苦勞である。四苦八苦するし、真っ暗。しかし、λόγος は神と共にあるのであれば、私は言葉=神(1:1)を諦めない生き方がしたい。それが私の life style。

《共に希望を見出して》

研修教会：長住バプテスト教会

推薦教会：鳥飼バプテスト教会

選科3年 林 守鎮



コロナ危機の影響によって様々なことが不安な状況を過ごしています。選科3年の必修科目である臨床牧会の日本バプテスト病院での実習ができるかどうか、あるいは学んでいる科目が対面授業になったり、対面授業とリモート授業が平行で行われたり、リモート授業のみになったり、大学の感染拡大警戒レベル対応に応じて落ち着かない状況の中で前期の学びが終わりました。結局実習のための京都にはいけなくなりました。そしてコロナワクチンの接種が出来るようになって、接種が済んだらコロナ危機を乗り越えられるかと期待しましたが、次々に変異ウイルスが出現して、続いて私たちは先が見えない時を過ごしています。コロナ危機だけではなく、自分自身のことや家族のことなど目に見えない先のことについての不安によって私たちは、心配や思い煩いに襲われています。

しかしながら、私が信じている神さまは、いつも変わらずに私たちに希望を与えてくださっておられます。道であり、真理であり、命であるイエス・キリストによって、周囲の状況にかかわらず、希望を見出すことができると思います。にもかかわらず現実の中を生きている者として、それは決して安易なことではないのです。

神学部を通して学んだことは、このように決して安易なところではない道を、私一人で歩いていくのではないことです。すなわち、多くの方々の応援と祈り、支えによって、あるいはその方々と共に歩きながら神さまに望みをおいて進んでいくことでしょう。希望のお方である神さまのところに向かう道は、共に歩く時、隣り人と手をつないで一緒に行く時、不安を乗り越えて進める道になると思います。

人と人が対面で会いながら話し合いをすることより、リモートの方が簡単で良いと思いつつも、しかし人と会えないという寂しさについては、どうしようもできないことも事実であります。このようなコロナの時代を生きている私たちは、一人ではなく共に希望を見出して、状況に一喜一憂するより神さまに望みをおいていくことが必要ではないか思います。なぜなら私たちが信じている神さまは、私たちを愛しておられる希望のお方であるからです。

私の魂よなぜ打ち沈むのか、なぜ呻くのか。神を待ち望め。私はなお、神をほめたたえる「御顔こそ、わが救い」と。わが神よ。詩編43編5節

《未来とは》

研修教会：鳥栖キリスト教会
推薦教会：三鷹バプテスト教会
特別研修生 日比 亜門



2021年夏、東京オリンピックがあった。このオリンピック開催について賛否両論あるだろうが、しかし私個人としては1つ気に入っている点がある。それはオリンピックのマスコットキャラクターだ。青色とピンク色の2体のキャラクターで、名前はそれぞれ「ミライトワ」と「ソメイティ」という。2頭身のデフォルメが効いた可愛い姿でありながら、そのシンプルさの中にオリンピックロゴや桜のモチーフがうまく盛り込まれていて、秀逸なデザインだと感心した。両方とも好きなのだが、どちらかというとうい方が好きだ。それはデザインもさることながら、その名前も良いと感じたからである。先程紹介した通り「ミライトワ」という名前で、それはおそらく「未来（みらい）＋永遠（とわ）」という組み合わせ、そして「未来とは？」という問いかけのダブルミーニングであるだろう。過去から現在、未来へと向かって生きている私たち人間にとって、「未来とは？」という問いかけは重大なテーマでありえるだろうし、またそれを「永遠に」と望むのもまたありえることである。このようなネーミングとデザインから、私はミライトワを良く出来たキャラクターであると評し、そしてその名のとおり「未来とは」何であるのかを少し考えたいと思った。

創世記の記述を根拠に、世界及び人間は「良い」ものとして創られている。そのような方向づけであるので、私たちが望む未来とは、やはり「良い」ものである。裏を返すと、未来は良いものであるという「希望」があるから、私たちは今を生きられるのだろう。そうでなければ悲しい。訪れる未来が悪いもので、これから絶望が来ると信じて、いったい誰が生きられるだろうか。いや、誰も生きられまい。だから「未来とは」という問いに対して、その応答は「良いものである」と言いたい。言いたい、のだ。こう表現したのは「未来とは良いものである」と断言できない現実があるからだ。絶望の中に人は生きられまいと書いたが、しかし実際、絶望の最中に置かれている人がいる。絶望の中に今、命を終えようとしている人がいる。そのような人に向かって「未来とは良いものである」などと言えるだろうか。いや、言えない。ただ1人のお方を除いて。しかしそのお方ならば、言うことができる。絶望の底に降りられ、死に打ち勝ち、永遠の命を注がれるお方だからだ。迷い出た1匹のためにどこまでも寄り添われるお方だからだ。だから、このお方、キリストによってのみ、「未来とは良いものである」と言える。ここに希望がある。

《呻く声が聞こえる》

研修教会：久留米キリスト教会

推薦教会：平尾バプテスト教会

神学部神学科4年：原田 仰



8月にフィールドツアーにて福岡県の玄海町へと向かった。玄海町とは原子力発電所がある町である。「玄海エネルギーパーク」という九州電力が運営している施設にて、原子力発電の仕組みや現在行っている事故への対応など、様々な資料を見た。またその後には原発反対運動をしている方の話も聞くことができた。なぜ反対するのか、何が危険であるのかなどのお話である。私は両者の話を聞いた上で、暮らしの豊かさの裏に様々な人の命の危険性があることを感じた。今日、私たちの暮らしには電気が欠かせないものとなっている。実際にこれらの電力によって生きることができる人、生活の助けを得ている人もいるだろう。しかし、この電力を供給するために命の危機におかれている人もいる。これは原発に限った話ではない。日本で起きた公害問題を見たとき、その背景には必ずと言っていいほど豊かさの追求があった。

前期における実践神学の講義でもこの公害問題について学んだ。この講義の中で、繰り返し触れられた聖書に言葉がある。それはローマの信徒への手紙の「被造物が呻いている」という趣旨の言葉だ。ローマ書を見たとき、パウロにおける「救い」の出来事の理解には「被造物の救い」が含まれていると読み取ることができるのである。実際に我々は日本において起きた原発事故による大気汚染や昨今増え続けている豪雨の被害、またその要因の一つとみられる地球温暖化現象において「被造物の呻き」を聞いている。私たちの暮らしはどんどんと便利があふれてくるようになった。しかし、そのことと同時に被造物の呻きの声も大きくなってきていることにも注目せざるを得ないのではないだろうか。

イエスは「主の日（終末）が近い」ということを告げ、病いの中にある者や虐げられている者など苦しみの中にある人々へと働きかけた。その時に呻いていた人たちに「救い」の喜びと希望を真っ先に伝え、その人たちのために仕えた。イエスは「呻き」にこそ積極的に働きかけていたのである。私は現代において、まさに「被造物とわたしたちは共に呻いている」ということを実感している。同時に呻きにこそ仕えたイエスの物語に触れた私はどう生きるのか、その問いに今日も応える。

《前方コロナ — 後方恵み》

研修教会：野方キリスト教会
推薦教会：博多キリスト教会
神学部神学科4年 吉田睿濤



ついにイレギュラーであるはずだった生活がついにレギュラーな生活へと転換していくような、なんとも複雑な思いを持っています。当たり前のようにできたことが当たり前のようにしてはいけな、反対に絶対に不可能だと思っていたことが可能という環境を作り出し、今もこの世界に多大な影響を及ぼしているこの存在。そう、誰もが知っている新型コロナウイルス。おかしな質問かもしれませんが、皆さんはこのコロナとどのように生きているのでしょうか。

わたしはこの問いにすぐには答えることができませんでした。新型コロナウイルスが爆発的に増え、感染が広がっていた初期の頃はコロナウイルスが得体の知れないものとして世界に顔を出し始めました。おそらくすべての人がこの現状（コロナ）を受け入れることができなかつたと思います。その理由は、コロナが自分たちの生活環境の範囲外の存在だったからです。もともと自分の生活の中に入ってくることのなかつた存在、計画外的出来事、それによって受けた苦しみ。しかしこの大事件の源であるコロナが今や、皆さんの日常の中にいつの間にか入り込み、当たり前のように生活していないのでしょうか。そうは言ってもコロナによって苦しみを覚えている人がいなくなつたということではありません。教会も思うようにいくことができない、ともに対面して集まって何かをする感覚さえなくなりつつある... このような状況をどうにかして欲しく神さまに引き続き祈り続けてきました。しかし、最近神さまがわたしにこんな言葉を与えてくださいます。「数えてみよ主の恵みを」。今、与えられているこの状況がどうであれともにおられる主の許して下さつた恵みが何であるか、何だつたか思い出すことがとても大切なことだと思ひました。苦しい状況が自分の目にみえるように前に立ちほだかつている中で、それと同時に自分の背中後ろで力強く支えている恵みに気づいていませんでした。目に見えないように背中後ろにあるからです。しかし心を落ち着かせ、今一度その背中を支えているものを感じようとしています。「数えてみよ主の恵みを」。

本当に大変な時を生きていますが、苦しい現実で目が見えずとも、私たちにすでに与えられた主の素晴らしい恵みを再発見する喜びがありますように。

《今を共に、明日を望む》

研修教会：福岡城西キリスト教会

推薦教会：府中キリスト教会

神学部神学科1年 長尾基詩



神学部に入學して約半年が過ぎた。入學からここまでの学校生活と教会生活の充実には、多くの人に心を砕いていただき、祈りに支えられて感謝しかない。否、今思えば生まれてきてから私はずっと祈りに覚えられ、暖かく育まれてきた。文字通り、教会で生活してきた私にとってある種キリストの救いと赦しとは生の全領域において前提であり、暗闇の中、歩みの途上に主と出会うという感覚をいまいち持ちづらいのが正直なところではある。しかし、そんな私にも主が共におられるという事を強く想起させる出来事が起こることもある。

神学生になってから寮母の田中さん主催のホームレス支援活動「ゆるまちネットワーク」の活動に参加させていただけることになった。天神付近の野宿生活者の方々に調理した弁当を、お配りするという活動だ。生活保護を受けておられない方に絞った支援活動ではあるが、毎回平均で50人ほどの人が開始時間の1時間以上前から行列を作っている。私は、コロナ禍からの活動しか経験がないので経済状況が悪化している、していないの問題はわからないが15年以上も支援活動に携わっているという田中さんのお話を聞く限り、一時的な現象というのでは済まされないような感じがする。そこにボランティアで来てくださっている方々にも元々野宿生活をされていた方が多くいる。実体験として事情を知っている方の話からは気づかされるものが多い。

ある人がこんな話を私にしてくれた。「君、何歳？おいはね、明日で65歳と5か月3週間ぴったしたい。」衝撃を覚えた。この読者の中に私を含め、明日が自分が生まれた日から、何年と何か月と何週間と何日後かなんて考えている人が果たしているだろうか。しどろもどろに年齢だけぼそっと答えたのが精いっぱいだった私にとってこの一言はある御言葉の読み方を一変させてしまった。マタイ6:34「だから明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」当たり前のことだが、この明日とは、彼らにとっては未来を表す修辭的表現でも何でもなく、本当に「明日」のことなのだ。明日、食べるものがない、自分に明日が来るかどうかわからないという瀬戸際において、主が私たちの明日を憂い、また備えていてくださる。主と出会った、ある夏の日の出来事であった。

6. 編集後記

今年から、毎年発行して各教会に送付している「道」を、原則インターネットのみでの公開とさせていただくことになりました。神学生数の減少により、担ってきた仕事をこれまでと同様にすることが困難になってきたからです。

新型コロナウイルスが依然として猛威をふるい続けている状況で、私たち神学部学生会は今年最終学年の方が卒業してのち、神学生の負担がこれ以上大きくならないように実現可能な範囲での奉仕の担い方というものを真剣に考えています。まさに機構改革のただなかにあるわけです。

我々の負担を軽くするということは相対的にこれをお読みになっている各教会の方々に印刷、掲示などの負担を強いることになることは重々理解しています。神学部とは全国諸教会の皆様方の支えなしには立つことのできない学びの場であるという事を実感させられる日々です。私たちを覚え支えてくださっているすべての方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。至らないことのこの上なく多い私たちですが、皆さまと共に、主に在って成長していけたらと思います。

2021年度 西南学院大学神学部学生会対外委員会一同

『道』2021（年刊・第46号）

発行日	2021年10月8日
発行者	西南学院大学神学部学生会
編集	神学部学生会対外委員会
	安里道直 嶋田健治
	原田 仰 長尾基詩
表紙イラスト	日比亜門

Seinan, Be True To Christ.

西南よ、キリストに忠実なれ。